

ご退職の先生からのメッセージ

定年退職にあたり

My Gratitude to Students, Teachers, and Rikkyo University

藤井 陽江 Harue Fujii

“ 立教に浸りて ”

この度、定年退職に際しての一文を学部より依頼され、あらためて定年を迎えたことを意識致しました。最近、特に研究休暇を終えた2002年後期授業再開からの毎日は、たいした事をこなしている訳でもないが日に日に忙しく、唯ただ時間だけが走馬灯のように回転するばかりで、事は運ばず焦燥感にかられた最終年です。これが定年期というものかと認識せざるを得ません。本来ならば、永年勤めた処を去ることに一抹の寂しさを感じ入り、思いを噛みしめることでしょうか、余りある思い出の過ぎし日を振りかえり、思い起こす暇まもなく追われ追われで最終日を迎えそうなこの頃です。この様な次第ですが、今までに出遭った多くの学生達や多くの立教人と交わした貴重な一こま一こまに思いを巡らせ、私も立教人の仲間であることの証としたい。

私は、昭和39年（1964年）4月 当時一般教育部保健体育科所属の助手として赴任し39年が経ちました。平成16年（2004年）の春とうとう何時の日か訪れる定年退職の期を迎えましたが、私が定年退職者に名を連ねられるとは、夢ゆめ想像もつかなかったことで我ながら驚きです。39年、40年は宇宙の存続からみれば塵、埃のようなものでしょうが、昨日のこの様と言うほど短くはなく、またそれ程長かったとも感じられないのは私が今まで生きてきた間の不思議なことの一つです。実に感慨深く思います。今年立教大学創立130年を迎えますが、私が心づいた青年期から、壮年期、初高齢期にわたり人生の肝要な40年が立教大学とともにありました。この間成し得た成果をみれば馬齢を重ねたばかりというと馬にも申し訳がたたぬほど恥ずかしさでいっぱいですが、別な意味では立教の自由な思想と歴史の中で人となりを育ませて頂き、立教人として在ることのこよなき嬉しさと、生涯の誇りに満ち満ちています。

“ 忘れ得ぬ学園紛争 ”

定年退職の期に及ぶ今日に至っても、折りにふれ思い出す事は学園紛争です。第2次世界大戦後 昭和24年('49)新制大学発足後から、更にその以前から学生運動の根はあったのでしょう。政府による大学管理法案、学園の民主化、授業料の値上げの反対運動を機に'48年全学連（全日本学生自治会総連）が組織され、1960年の安保反対運動では全国的な運動が広範囲に血気に燃えた時代がありました。その後'60年半ば全共闘（全学共闘会議）の結成から'68-9年全国大学紛

争のピークを迎えたことは広く知るところです。我が立教大学における学生運動も、私が在職して7年目の昭和45年（'71）、46年（'72）頃で、文学部に端を発した学園紛争が、当時の一般教育部へ波及し長い年月にわたり学生運動の洗礼を受けたのでした。大学当局、教授会のみならず教員個人、個人の倫理性が問い返され、自己否定 や 自己改革 などが問題にされました。大衆団交あり、教授会や個人への攻撃的応答で、毎夜ぎりぎりの最終電車で夜半すぎの帰宅となり、心身不調をきたす先生方が続出し、なかには学生との折衝がトラウマとなりその後も大変な事態になっていました。教授会は運動学生たちの侵入・乱入で大学構内では開けず、遠隔地の施設を借りながらの流浪の会議の連続でした。顔はヘルメットとマスクで覆われ、手には長い棒を持った学生達は、どこで聞きつけるのか遠隔地の会議場にまでやってきます。大学の校門入り口のバリケード、各建物、教室のロックアウト、無造作な研究室への出入などで日常の業務や授業はスムーズに展開出来る状況ではありませんでした。顔も名前も明かさずに激しく攻撃的に寄ってくる学生たち、なかには他大学の学生もいたようだが、また騒ぎの周りであくねている学生たち、教室で漫然とする学生たちなどさまざまですが、私にとってはみな同じ様に学生であり、向いてくる学生とは時間の限り話し合った記憶があります。運動学生の質問や言い寄りには、答えても黙しても許されずかみ合うことにはなりません、先方の学生の都合や、教師方に誠意が無くはないと判断されたとき自然に離れていったように思いました。これは私の勝手な判断で、もしかすると話にならないと閉口したのかもかもしれません。

私は、紛争中でもロックアウトされていない体育館では、少々の妨害はありながらも授業を行って、実技の合間に教師も学生同士も話し合う場を幾度となく持ちました。「バドミントン」種目に40歳代の男子学生が受講していて、学生運動に熱心かと思っていたが、ある報道機関の社員で長期研修を活用し勉学方々、学園紛争の状況を見届けてくる命で入学したことを話していました。紛争の全貌から鎮静化に至る大学当局の態勢、教員の学生対応、学生へのケア、今後への進め方などその学生なりに掴んだ様子でした。当大学は当面取りたてて事件めいた不祥事や、不味い点が見当たらない大学だと言い、半ば張合いがないなどとも話していました。不味い点が見当たらずぬことがよいのかどうかは解りませんが、その学生の所属機関から本学の紛争にかかわる不味い記事の掲載はなかったように思います。確かに、紛争中はかなり過激な状況もありましたが、大学内に警察権を導入することなく不器用ながら大学の良識のもとに、周囲の動きに沿って鎮静化がみられたことは、これぞ立教の在るべき姿として今にしても本当によかったと思います。その頃に比べると現在はなんと平和な学園生活が営まれていることでしょう。これも先人達の闘争の時代を通過しての今日です。時代の流れで止むに止まれぬ事態がありましたが、この時代の学生達からも学ぶことが沢山ありました。私なりの心に刻んだことは当時“人間性の回復”でした。学生とか職員とか、教員に限らず権威的な役割を超えて、互いに視線を等しく共存共栄を考えていくことでした。人間のあらゆる状況に対して先ず実感的に受けとめることで、事の良し悪しの判断はその先の関係に委ねていけばよいと。そして、

私はこの学びを実現に向けて何を成すべきか、本気で考え眠れぬ夜を何日繰り返したことでしよう。

“ ころのよりどころ ”

今から30年ほど前の学園紛争は、学生も職員も教師もともにものにもころにも傷跡を残しましたが、大切な課題も沢山残してくれたと思います。私は紛争の体験後その以前と同じ様なままで、学生の前に立つことは出来ないと思然たる思いを巡らしていました。気がつくとかウンセリングに出会いカウンセラーを養成する小さな教室に出向いていました。'71年頃は、時代的に経済的にも時間的にも家庭の主婦達がやっとこの様な教室に参加する余裕が出てきた時期で、教室の存在自体がユニークでした。私はこの教室で、あらためてひとのころの複雑さや誰もが持ち合わせているころの特質、ころの在り様についてグループ体験の学習（ウンセリングの特徴的学習方法）を通して体感的に理解、認識していく学びを始めたのです。ひとのころの強さや脆さ、些細なことで瞬時に変化する繊細さ大胆さ、また無視や否定は不安になりやすいなどのころの状態、ころを左右することばや動作、その場の状況を、からだに問いかけからだの中心からささやかれる虚言や歪曲の入る隙のない直感的な感覚からの答えを聴く体験学習です。私が入門当初から週3回も足繁く通いだすことになったのは、その教室でひとが発することばや動作を全身傾けて聴き込み、現実の対人的な場面で自然に起こってくる生身の自分をさらけだすことが、もち得る感性を磨いているという感覚がつかめる場として他にはないと思えてのことでした。

ある時、私はこの学習は何のために、誰のためにやっているのかひたすら考えていた時、もう13年程前のことになりますが、授業を終えて帰る道すがら走り寄る女子学生から、突然に話しを聴いて欲しいと懇願されました。切羽つまった様子だったので研究室へ戻って聴く事になりました。その学生は、家族内の軋轢状況を50分ほど夢中で話していました。私は授業の担当教員とは言いながら、こんなことまで他人の話しを聴いてよいのかと思うほどリアルな内容で、驚きと躊躇とが混じったまま聴いていました。学生は、なにをどれ程話したのかはっきり覚えていない様子でしたが、家族内の事態は大変だが、今は話せたことで落ち着きを取り戻せたと、少々安堵な様子で礼を言って帰りました。私は何だか解りませんが訪ねてきた人が、落着いて去れるならばまあよしと思ひ、家族もいろいろな状況があるものだと考えさせられました。次の週にもその学生は研究室を訪ねてきましたが、先週とは違う爽やかな表情でした。先週の帰り道からの一週間、日に日に心身ともに軽くなっていった不思議な体験を聴かせてくれました。先週までころが重くて重くてどうしようもなく、誰かに聞いてもらいたかったことを吐き出した感じだということ。先週大学から駅まで歩いていくと、右に一步足を出すと右肩から小石がころっと落ちて、次に左足を一步を出すと左肩から小石がころっと落ちる。歩く度に同じことが起きて、気づいてみると5日目ぐらいには、落ちてくる石が1個もなくなった。そしてと

でも軽やかになれた。こんなことがあるのかなと次の日も、次の日も楽しみに歩いて、生きてよかった、得した感じだ。ということをお伝えにきてくれました。生きてよかったとは何とよい話を聴かせに来てくれたのでしょうか。私もすごく嬉しく聴きました。

今日のようなことがあると、カウンセリングの学習が直接関連あるかどうか解りませんが、私のなかではつながっていて、得したと思えました。口幅ったいのですが、人間として生まれてきたことへの感謝として、生涯にわたり“人間としての技量の洗練” 崎尾英子 ころを聞くより を目指すものです。その取り組む「すべ」を学ばせて頂きました。それは自己の内面と向かい合うこと、自己の内面を掘り下げること、自己の内面とのつながりなどまさに未知の体験です。ここに生きがいを見出せるならば生涯退屈せずに、鮮度を保ち爽やかな暮らしを実現させていけるのではないのでしょうか。おおいに未知との遭遇を楽しみたいと思います。

“今年だから見られるもの”

最近、必要に迫られながらコンピューターとコミュニケートしている状態が多くなっていますが、人間を相手にする時の緊張感や気遣いなどは不用で、配慮など面倒なことは避けて、コンピューターとの安易なつきあいが、人間同志の情のつながりを希薄なものにしていることは指摘すべき点でしょう。コンピューター操作の不得手な私で説得力に欠けますが、

私の生活を取り巻く其処、ここで寸時の出会いがところに響き、目にやきつく印象的な通い合を。ここではたった3つの出来事しか述べられませんが、その日、その時のひととの出会いはすべからくころの栄養となる一期一会です。

*2003年4月半ばのことでした。校門から研究棟まで

A先生「藤井先生おはようございます。」

藤井「あーA先生おはようございます。…私も今年度で退職となります。お世話様でした。」

A先生「あーそうですか。先生信じられませんか。そうですか。それじゃあ今年1年をどんな風に過ごされたいですか。」

藤井「あまり特に考えていませんでしたが、何らかわらぬ今までと同じ1年であればいいと思います。平生の平平です。中国語でピンピンといいますが、平ピンでいきたいです。特別なことなく普通に毎年と同じように終われる事を願っています。」

A先生「あーそうですか。意外でした。最終年はこうありたいと希望があると思っていました。そーですか。そうゆう考え方があるんですね。静かでもいいですね。うーんでは又、それでも健康にはお気をつけ下さい。」

自分の中では、何事もなく特別な1年にならぬように、それ以上は無しと決まっていたのですが、最終の1年何を考えていることかを、あらためて考える機会を与えて頂きました。私の現役最終年を気遣って下さる心根に熱い血の通いを感じて嬉しいです。その上親身にな

って健康にまで気を使って下さり恐縮するほどの気配りを頂きました。A先生本当にありがとうございました。

*2004年1月6日 朝日がたっぷりな穏やかな日

藤井 「B先生 おはようございます。」

B先生 「おはようございます。いいお天気で何よりです。学生も喜んでますよ。」

藤井 「最終日にまた、復習できて本当によかったですね。あー私は最終年の最後の授業になりました。B先生は来年度は授業ありませんね。私もいないのすが、残念。」

B先生 「先生、今年定年を迎えられるんですね。」

藤井 「そーなんです。長かったようでも、短かったようでもありますが、私最終年になってつくづくと感じているんですけど、大学へ来るのがとっても楽しいんです。それで学生と一緒に授業をやるのが嬉しくてしょうがないんですよ。嬉しさが皮膚から染みってくる感じなんです。よく心から嬉しく思います。ということ聴くこと多いのですが、染みってくる感じの嬉しさは初めての感覚で味わい深いです。だから、大学にくる、学生と授業する嬉しさって、気がつかなかっただけで、ずーっと以前から嬉しかったんだと思えるんです。それで通ってきてたんだなって思えるんですよ。

今年で退職というのであらためて感じ取っているんでしょうが。ずーっとうれしかったんだとやっと思ついたのでありますね。」

B先生 「あー先生いい話し聴かせて頂きました。ぼくも定年迎えるときそうありがたいですね。そうなれたらいいですね。ことばが染みってくる感じって凄いですよ。最後にしていいお話しをきかせて頂きありがとうございます。くれぐれもお身体に気をつけて下さい。お元気で、失礼します。」

藤井 「B先生 立教大学のためにご尽力下さって本当に有難うございました。来年度からまた他の職場で、精一杯頑張ってください。そしてまた、立教も担当して下さい。どうぞお元気に皆さんによろしくお伝え下さい。ではさようなら。」

陽だまりの中で、真実でおだやかな会話が出来て、ありがとうございました。

*2003年11月 銀杏の葉が

風が吹いていたがそれほど寒くは感じられない、11月のある日の夕方、自宅マンションの横に結構大きな黄金色の銀杏の木が落ち葉にならんとする葉をびっしりつけていました。25mぐらい離れると天辺が見えて、私はしばし黄金色の見事さに見入っていました。だんだんと近づいて10mほどになった時突風にも似た風がビューッと吹いてきました。銀杏の葉は凄いいで狂ったように銀杏吹雪となりました。散り様を私に見届けさせるが如く、30秒ほどで3分の2程の葉が散りました。木の下は見事な銀杏絨緞が敷き詰められこれほど豪勢な敷物は見たこと

ありません。黄金色の美しさに思わずウワーッと叫んでいました。風も静まりおもむろに8 mほどの絨緞を三往復して足裏の銀杏葉の感触をたっぷり味わったのです。最近味わった事のない豊かな気分でした。それにしてもさきほどのこの木だけに吹いた突風は何だったのでしょうか。どうしても私の定年退職へのはなむけとしか思えません。今日もまた素晴らしく、嬉しいことに出会うことができました。木も人も去る時は一瞬にして豪勢なるがよしを銀杏が教えてくれました。

“ すべてに 感謝 ”

2004年 1月22日

自己紹介

プロフィール

立教大学勤務歴

1964年4月1日	立教大学一般教育部保健体育科	助手
1969年4月1日	同 上	講師
1984年4月1日	同 上	助教授
1992年4月1日	同 上	教授
1994年4月1日	同上 大学教育研究部	教授
1998年4月1日	同上 コミュニティ福祉学部	教授
2004年3月31日	同 上	教授 退職

教科担当歴

保健体育科

科目名：体育実技、体育実技、保健体育講義
 担当種目：球技系 バドミントン、硬式テニス、ハンドボール、バスケットボール等
 体操系 体操（徒手）
 野外系 スキー、スケート、ワンダーフォーゲル、水泳、自然教室等
 講義：体育理論

カリキュラム再編成期（1998年）

スポーツ・健康科学教育研究室

科目名：スポーツ実習
 担当種目：球技系 バドミントン、ゴルフ
 体操・トレーニング系 セルフケア体操、トレーニング等
 野外系 自然教室
 講義：健康の科学、スポーツ文化論

全学共通カリキュラム（1997～）スポーツ・健康科学教育研究室

科目名：スポーツスタディ、スポーツプログラム
 担当種目：球技系 バドミントン、ゴルフ
 体操系 セルフケア体操
 東洋養生系 太極拳
 ウェルネス系 心身ウェルネス、ウェルネス実践論
 野外系 自然教室、スキー教室
 講義：健康の科学、スポーツ文化論

コミュニティ福祉学部

担当科目：基礎演習、フィールドスタディ入門（演劇）（1998年）
 心身ウェルネス（1998-1999年）
 フィールドスタディ入門（救急法）（1999-2003年）
 文献講読演習（2003年）



専門領域

- * 実技領域：器械体操を専門としていたが、後ダンス系、社交ダンスへ移行し、
1964年 アマチュアメダルテストゴールド取得、プロフェッショナルD・E級参加
1967年 全日本スキー連盟公認基礎スキー検定1級取得
1985年 姿勢保健均整学校指定 姿勢保健均整士（ボディデザイナー）資格取得
1993年 ダンベル体操指導者A級資格、アロマフィットネスデザイナーA級資格取得
1997年 野外キャンプ上級指導者資格取得
2002年 中国伝統養生学気功養生法「八段錦」修得（上海体育学院養生学研究科認証）

1964年大学所属時は、1・2年次生保健体育必修科目として各種目を体験させる考え方により各教員数種目の担当を余儀なくされた。その後、カリキュラムの検討、再編成、選択科目となり、各教員の専門性を活かす科の意向により種目を限定。

- * 研究領域：大学生の身体意識（ボディイメージ）と保健行動、健康イメージについて
大学生の運動・スポーツ活動参加に関する国際比較研究
東洋養生学中国伝統養生法気功「八段錦」の研究
- * 所属学会：日本体育学会（体育原理研究会）、レジャー・レクリエーション学会、
日本学校保健学会、生涯スポーツ学会、日本ゴルフ学会
大学体育東洋養生学研究会
- * 社会的活動：1979年 全日本カウンセリング協議会2級カウンセラー資格取得
1980年 全日本カウンセリング協議会加盟東京加代リッパースクール理事
1988年 日本学校フォークダンス委員 ~1990年

近 況

- 2001年～2002年 長期研究休暇 中国上海市上海体育学院「伝統養生学」研究留学
東洋健康養生学 中国伝統養生学 すべからく気功 呼吸法
気功養生法 動気功 「八段錦」「太極拳」「易筋経」「十二段錦」
「回春功」「練功十八法」「馬王堆導引」等
- 2001年10月 中国武術・論文国際競技会 江西省廬山大会武術出場
開会式エキジビション表演「木兰扇」
太極拳の部「簡化二十四式」留学生の部一位
- 2002年5月 中国武術・論文国際競技会 上海市上海大会論文発表
中国伝統養生法「八段錦」の普及について 日本国への場合
- 2003年10月19日 国内'03ねりんピック徳島 出場
「太極拳」の部 東京都代表選手チーム
- 2003年11月 立大箱根駅伝サポーター登録（立教大学箱根駅伝出場選手の支援）

趣 味 「和太鼓」大江戸助六流太鼓門下生 1988年～

生活信条 “すべからく自然体” “すべてに感謝”
“教師・女性で在る前に人間で在れ”
“他人を退けてまで先ずるべからず”
“Q.O.L（質の高い生活）の快い老年期に”

第2ステージライフワーク：カウンセリング、ボディデザイン、
中国伝統養生術「気功」等を総合的に採り入れた
「藤ヒューマンヘルスデザイン研究室」（仮称）

